2026年4月に着任した、基盤教育院の新しい先生をご紹介します。

新任教員紹介

基盤教育院は、大学における4年間の学びの基礎となる知識やスキルを身につけるとともに、卒業後も生涯にわたり学び続ける力を養うことを目的としています。

新任教員の紹介ページはこちら▶

基盤教育院 谷岡 慎一（たにおか しんいち） 教授

研究テーマ

- 地方自治体における気候変動問題マルチレベルガバナンス
- 地方自治体の社会的課題（ジェンダー平等・多文化共生・人口減少問題等）や地域経済への対応

研究内容

気候変動は深刻な課題であり、この状況を変えるには、国際社会や各国政府だけでなく各地域の自治体や経済活動での対応が不可欠です。そこで私は、気候変動対策に取り組む地方自治体の組織的なあり方を研究しています。

地域への取り組みと今後の展望

気候変動問題への対応は差し迫った課題ですが、地方自治体の気候変動対策の研究はあまり進んでいません。将来的には、全国的に地方自治体の気候変動対策を推し進めていきたいです。

高校時代からテニスを続けています。

基盤教育院 辻 和希（つじ かずき） 講師

研究テーマ

- 18世紀フランスにおける人間とそれ以外の動物の境界に関わる議論
- 現代アートの鑑賞と対話
- アート鑑賞と道徳教育の接続

研究内容

18世紀は科学が発達し、動物と人間の境界が曖昧になり始めた時期でした。その曖昧さは道徳や美術などの鑑賞教育に少なからぬ影響を与えたと思われます。その影響がどのようなものだったのかを研究しています。

地域への取り組みと今後の展望

対話に関する研究にも取り組んでいます。そこで得られた知見を学校教育へ還元するとともに、地域社会における実践にも活用を広げ、さまざまな人々と学び合う場の創出に貢献したいです。

最近読んだ本でおすすめのものです。

基盤教育院 西木 貴美子（にしき きみこ） 教授

研究テーマ

- 非行少年における表情認知・感情理解の特性に関する研究
- 多感覚環境（スヌーズレン）の効果と活用に関する研究

研究内容

人の表情や状況から感情を読み取る働きと、光や音などの感覚刺激の受け止め方に着目した研究に取り組んでいます。心理学の視点から、一人ひとりの情報の受け取り方の特性に応じた教育・支援につなげることをめざしています。

地域への取り組みと今後の展望

北近畿・福知山の学校と連携し、子どもの感情理解や感覚アプローチ（スヌーズレン）の活用に取り組みたいです。児童相談所や少年鑑別所での実務経験と研究で得た知見を活かし、地域教育の充実に貢献していきます。

岡本太郎さんの作品が好きで、グッズを集めています。

今後のイベント案内

第11回 大学祭「福桔祭」
ステージイベント、模擬店など
10.31 SAT

秋季ミニオープンキャンパス
個別相談、VR・AR体験、リアルキャンパスツアーなど
10.31 SAT
同日開催！

各種SNS

イベント情報などを発信しています！

友達追加はこちら▲
@univfukuchiyama
@UnivFukuchiyama

皆さまのご意見をお寄せください
大学へのご意見は こちら

ご寄附のお願い

教育研究・地域連携を通して社会の発展に貢献できるよう「福知山公立大学基金」を設置しています。ご支援いただく皆さまからの寄附金は、持続可能な地域社会づくりに向けて、大学の特性を活かしたさまざまな事業に活用させていただきます。

▲詳細はこちら

2026年秋に公式サイトがリニューアル！

地域の皆さまからの寄稿を受け付けるコンテンツも予定しておりますので、ご期待ください！

地域とともに次代を紡ぐ
福知山公立大学
The University of Fukuchiyama

【地域経営学部】
地域経営学科／医療福祉経営学科
【情報学部】
情報学科
【大学院地域情報学研究科】
地域情報学専攻

〒620-0886 京都府福知山市字堀3370
TEL:0773-24-7100 FAX:0773-24-7170
https://www.fukuchiyama.ac.jp
福知山公立大学 検索

福公大だより「学舎新風」vol.9
発行 公立大学法人福知山公立大学 発行日 2026年9月

福公大だより

学舎新風

CONTENTS

P1 10年のあゆみ
P3 10周年記念事業レポート
P5 情報学を基盤とした地域協働型教育
P6 「地域協働型教育」の事例

地域とともに
これまでも これからも

2026年4月に、開学10周年を迎えました

福公大は開学10周年

10年のあゆみ

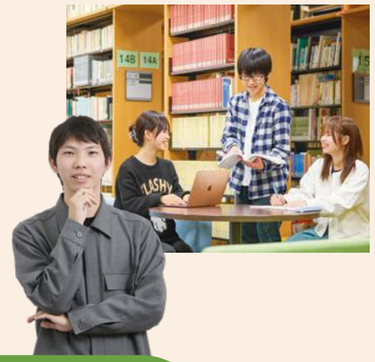
福知山公立大学は2026年度に開学10周年を迎えました。
これまで、地域の皆さまとともに多くの学びを育んできました。
温かなご支援に心より感謝申し上げます。

2016

福知山公立大学 開学

「市民の大学、地域のための大学、世界とともに歩む大学」を基本理念に北近畿地域唯一の4年制大学として、2016年に開学した福知山公立大学。

入学式では、新入生58名・2年生編入学1名の生徒を迎え、地域経営学部1学部2学科でスタートしました。井口和起前学長より、「全学を挙げて地域協働型の教育・研究活動に取り組み、地域の方々とともに地域社会の将来の担い手を育成することをめざす」と式辞がありました。



2020

情報学部開設

2020年4月に北近畿地域初の情報学部が新設され、新入生108名を迎えました。

情報学部では、高度な情報学・情報技術を学び、これらを活用して、社会課題に実践的に取り組むことで、新しい価値を創造し地域での生活を豊かにする知識・スキルを磨きます。

2024

大学院設置

Feature 1 地域と共に成長する大学院

情報学の深化をめざす研究開発に加え、その成果を地域に根ざした実践活動に適用することをめざします。

地域に根ざした教育・研究の「2本の柱」

地域社会に貢献する情報学の深化と研究開発
×
情報学による地域に根ざした実践的プロジェクトの遂行

Feature 2 実践的プロジェクトの成果による学位認定

学術研究による学位[修士(情報学)]だけでなく、地域での起業・共同開発事業等により、研究科での活動の成果を地域社会に実際に還元するための活動を通じて学位[修士(学術)]を取得できるプログラムを有しています。

情報学研究コース	地域情報プロジェクトコース
情報学研究の深化 学術研究成果を形成 修士(情報学)	実践的プロジェクト 地域社会に貢献する 修士(学術)

2026

開学10周年

2016年4月1日の開学から、福知山公立大学は10周年を迎えました。福知山公立大学は、これからも地域が直面するさまざまな課題に教職員と学生が一丸となって誠実に向き合い、地域の皆さまとともに学び、未来を創造していきます。次の10年も地域とともに歩み続ける大学として、ご支援をよろしくお願いいたします。

10th 福公大は開学10周年

数字で知る 福公大の今

開学から10周年を迎え、大きく成長し、
前進し続ける福公大の姿を数字から読み解きます。

福公大の学生数 (2026年5月1日時点)

935人

地域経営学部	444人
情報学部	454人
大学院	37人

福知山市の人口の約1.3%!!

活躍する福公大生 (2025年度の成果)

メディアに取り上げられた数
375件
(2025年1月1日～12月31日)
新聞など紙媒体のメディアに限定。(本学調べ)

STL 採択数
11事業

参加学生数
102人

STLとは地域を活性化する学生活動に対して、大学が活動費を支援する事業

地域とのつながり (2025年度の成果)

共同研究の件数
13件

受託事業の件数
9件

契約総額
約1,897万円

学外の委員会や講演会等への教員派遣数
約300人

本学が開催する講座の参加者数
延べ418人

10周年記念 事業レポート

開学10周年記念事業

いこてん オープニングセレモニー♪

観客参加型の即興劇

音楽サークルによる記念コンサート

寄贈者 横田様への花束贈呈

教職員のチェロとピアノによる演奏

学生・教職員が主体となり、文化や芸術、交流の場の創出をめざす事業「いこてん」。6月13日(土)にそのオープニングセレモニーが開催され、学生・教職員・地域住民の方々など約110名が参加しました。オープニングセレモニーでは、10周年記念事業実行委員長の西田副学長による挨拶や寄贈いただいたピアノの譲渡式、本学職員による歌の披露のほか、教職員や音楽サークルによる記念コンサートが行われ、会場は温かな雰囲気に包まれました。加えてコンサート終了後には、教職員と演劇サークルによる、観客参加型の即興劇が披露され、会場からは笑いや驚きの声が上がりました。

「いこてん」とは

開学10周年を記念して、誰にでも開かれた憩いの場であり、心を揺さぶるアーティスティックな展示に巡り合えるようにと願いを込め、「憩い」と「10(ten)」周年と展示をかけあわせて、「いこてん」と名づけました。

地域とつながる いこてんカフェ

毎週水曜日に本学2号館1階カフェスペースで開催している「いこてんカフェ」では、地域の喫茶店や飲食関連の学生団体などに出店いただき、飲食を通じて学生・教職員・地域の皆さまが気軽に交流できる場所づくりをめざしています。これまでにも、「コーヒーハウス ホアンカン」、「D1Cafe」、「自家焙煎新鮮珈琲Kandy」、学生団体「Drip Link」に出店いただきました。8月～9月の夏季休暇期間を挟み、10月～12月にも出店を予定しています。地域の皆さまもぜひお気軽にお越しください。

いこてんでの展示

モンゴル工芸品の展示

12月まで4号館1階メディアセンターにて、豊岡市立日本・モンゴル民族博物館収蔵の貴重な工芸品を間近に鑑賞できる展示を行っています。

かやのそと、かやのおと
(不定期開催)

12月まで5号館1階入り口付近にて参加型アート展示「かやのそと、かやのおと」を開催。来場者が入力した言葉が継続的に投影されます。

地域特別展示

鬼瓦展示

日本鬼師の会より全国各地の貴重な鬼瓦4点が寄贈されました。福知山市の鬼文化への理解促進を目的に、1号館1階エントランスに展示しています。

丹波漆展

6月2日から6月30日まで、NPO法人丹波漆の協力により漆にまつわる道具や工芸品、パネル等を展示しました。

その他10周年事業

JR福知山駅 VIERRA福知山 えきなかキャンパスでのイベント

今後のイベント▶

「えきなかキャンパス」を開設

4月18日、本学の開学10周年を記念し、地域に開かれた学びと交流の拠点として、JR福知山駅構内に「えきなかキャンパス」を新たに開設。それを記念し、開設記念イベントを開催しました。

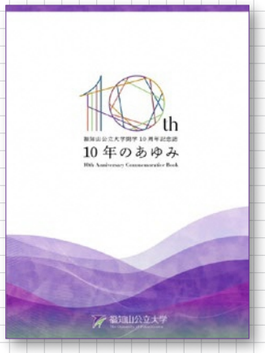
ちいとま音楽ラボ

7月4日、「ちいとま音楽ラボ」を開催。情報学部橋田ゼミの学生が制作したオリジナル楽曲や歌唱合成作品、編曲作品などを実演を交えながら紹介しました。

市民向けAI講座説明会

7月10日、西田副学長による市民向けAI講座の説明会を開催しました。参加者がAIを活用し、1か月かけて身近な課題に取り組む講座の進め方やねらいを共有しました。

開学10周年記念誌



福知山公立大学の10年間の歩みを記念誌としてアーカイブ。教育・研究の成果だけでなく、イベントの開催、地域連携の取り組みなど、本学における多様な活動の軌跡を当時の写真とともに紹介しています。ぜひご覧ください。

こちらからご覧ください▶

開学10周年記念文集

開学以来、本学を支えてくださった地域の方々からの寄稿や、卒業生・在校生による等身大のメッセージや未来への展望などを多数収録しています。卒業生からの寄稿では、学生時代の学びや生活も紹介しており、進学を検討している高校生の皆さまにも読んでいただきたい内容となっています。

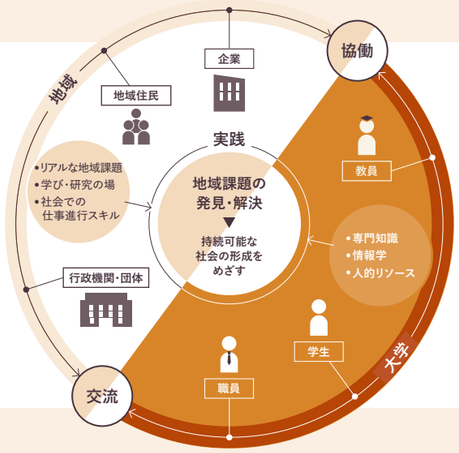
こちらからご覧ください▶

情報学を基盤とした地域協働型教育

「地域協働型教育」とは

学生×地域の人たち（住民・行政・企業など）で地域社会のリアルな課題解決に挑む、実践的な学びのスタイルです。現代社会では必須となった情報学の修得に加え、フィールドワークを含む地域協働に取り組み、地域経営学部では地域をマネジメントする力を、情報学部では情報技術を地域課題の解決に応用するスキルを身につけます。

各ステークスホルダーの関係 ▶



地域を知り、つながり、情報学で読み解き、地域で実践する学びを重ねます。

地域を知る
地域の課題や現状を知る

地域とつながる
産学官連携で課題解決へ

つながりを循環させて学びを深める

地域で実践する
地域で成果を試し、価値を生み出す

情報学で読み解く・試す
情報学の力で分析し、アイデアを形にする

「地域協働型教育」の事例

第21回 京都から発信する政策研究交流大会
公益財団法人大学コンソーシアム京都理事長賞

AI×行政のオープンデータで、橋の「リスクスコア」の評価に挑む

地域経営学部 4年 高田（たかだ） 愛華（あいか）さん

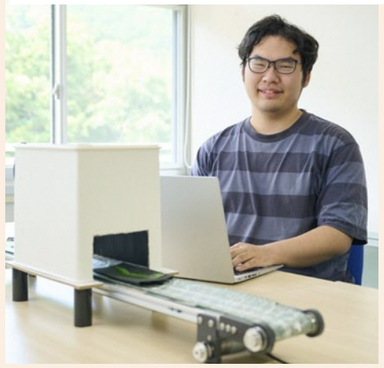
近年大きな社会課題として浮上しているインフラの老朽化。私は、生活インフラの中でも特に危険性が顕在化しにくい「橋」に着目し、修繕優先度を示すリスクスコアを算出しました。このリスクスコアは、行政による橋梁の定期点検データと、住民から寄せられた要望のキーワード分析を組み合わせて算出。要望データは自ら市役所に開示請求を行い、1〜2年生の授業で学んだPythonと生成AIを組み合わせ、分析を行いました。地域に根差した実践的なアプローチと研究内容が評価され、受賞につながりました。今後はこの研究を足がかりに、人手不足に悩む地域のインフラ管理における意思決定をサポートしていきたいと考えています。

教員コメント

行政が蓄積する橋梁の点検データと住民の声を組み合わせ、危険性や修繕の優先度を分かりやすく示した点が、政策研究大会において高く評価されました。地域の実情に即した実践的な研究であり、人員や予算が限られた自治体にとって、維持管理の方針を検討する際の有効な手掛かりとなることが期待されます。今後のさらなる発展も楽しみです。

担当教員 神谷達夫教授

「万願寺唐辛子」自動選別システムの開発



情報学部 4年 上村（うえむら） 和輝（かずき）さん

福知山市の特産品「万願寺唐辛子」の自動選別システムを山本吉伸教授の指導のもと、開発しています。従来の選別作業は手作業で規格ごとに仕分けしており、農家さんの負担が大きい状況でした。そこで、簡易なベルトコンベアとWebカメラ、電子機器を制御するコンピュータを用いた、画像判定による小型の選別システムを考案しました。開発においては、3年生までの研究経験から、画像判定ソフトウェアはスムーズに構築できました。しかし、未経験であった仕分け機の制御などハードウェアの開発には苦戦しており、現在は試行錯誤しながら進めている段階です。今後はこの選別システムを完成させ、選別作業の簡易化・標準化を図ることで、農家の方々の負担を軽減するとともに、大学生や地域の方、障がいのある方など、誰もが取り組みやすい作業にしていきたいと考えています。

地域の声

北近畿を代表する地場野菜として人気の高い「万願寺甘とうがらし」を栽培しています。出荷時の選別基準として、大きさ・重さなどの客観的な指標以上に、主観に依存する曲がり具合が重要となるため、選別に時間と精神的な負担がかかってしまいます。この作業の自動化により大きな負担軽減になるため、今後の開発に期待します。

さとこ農園 代表 浅野義則さま